

子ども同士の育ち合い・ 教師同士の育ち合い

竹田 好美

私が三月まで勤務していた幼稚園には、三歳児、四歳児、五歳児がそれぞれ一クラスずつありました。また、高層住宅の一階部分に位置し、園庭がどのクラスから見渡せるという環境の中にあります。これらの状況をよりよい方向で保育に

生かそうと、「異年齢の友達と共に育ち合う指導の工夫」というテーマのもと、園内研究を進めてきました。私にとっては、特に子ども同士が育ち合う姿が印象的でした。その育ち合いの姿についてお話ししようと思います。

なぜ異年齢なのか？

子ども同士がかかわる様子を記録に取る時、新たな発見がありました。同年齢の友達に強く自分を主張する子が、年下の子にはやさしく思いやりをもってかかわる姿、運動遊びの苦手な子が、年下の子と一緒に遊ぶ中で運動に興味をもっていく姿、年上の子が遊んでいる様子に刺激を受けて、やってみようと挑戦する姿などです。同年齢では表わしにくいことが年下なら表わしやすいのだろうか、また、年上の子の遊びに刺激を受けて、新たな意欲をかきたてられるのだろうか、つまりお互いに影響を与え合っているのではないだろうかと考えました。

また、幼稚園生活の中で、一人一人が自分を生き生きと表現するためには、幼稚園の中に自分の居場所があるということが大切だと思います。子

どもの人数が減ってきている今、個人差が大きければ大きいほど、自分のクラスの中だけでは自分の居場所となる得意な遊びや気の合う友達が見つけられない子がでてくることも予想できます。しかし、自分のクラスだけでなく、同学年の他のクラス、そして単学級であれば、異年齢のクラスへとかかわりの可能性を広げてあげること、そのような子どもたちの居場所を確保することができるとは思いません。

そこで、異年齢とのかかわりに注目して、それを活発に促すことで、多様な友達との出会いを



意味あるものとし、幼児一人一人が自分を生き生きと表現しながら、充実した園生活を送ることができるよう指導を工夫することが私達の課題だと考えました。

かけっこの場面から

運動会の練習が盛んに行われていた十月上旬のことです。四歳児のかけっこはコーンを回る折り返しのもの、三歳児のかけっこはその距離の半分を走り抜けるものでした。

四歳児が園庭でかけっこの練習を始めました。その様子を見ていた三歳児が「ほくもやりたいな」とつぶやいたのを聞き逃さず、「やりたいって言ってみようよ」と促しました。傍にいた他の三歳児も一緒に「入れて」とかけっこに加わりました。三歳児は四歳児担任に名前を呼ばれると、四歳児と同じように、「ハイ」と嬉しそうに手

を挙げてから走りました。四歳児とは体力差がありました。自分が四歳児と同じコースを走り切ったことで満足していたようです。

そこに五歳児が入ってきました。数回三歳児と一緒に走りましたが、必ず大差がつきます。物足りなさを感じていたのでしょうか、スタートラインにハンディをつけることを考えだしました。四歳児と一緒に、競うことで十分に自分の力を発揮して走ることができたようです。かけっこはこの後も人数が増え、更に盛り上がりました。

この事例には、三学年が同じ場所で生活を始めてから約半年の間、教師が異年齢の幼児同士のかわりを意味のあるものにしていこうと援助してきた成果が少しあらわれているように思います。まず、どの学年の幼児も自分が「面白そう」「やってみたい」と思った活動に、積極的・主体的に参加していることです。日頃から教師側も学

年にとらわれず、どの幼児も受け入れるという姿を子どもたちに見せてきた結果ではないでしょうか。また、五歳児がハンディをつけることを考えたことには、年上としての自信や思いやりを感じ取りました。異年齢とかかわる中で育ったことだと思います。私は、この事例から、教師が自分の学年の幼児だけでなく、他学級の幼児ともかわりをもつことによって、幼児が自分を自由に表現し、自己発揮しやすくなるという大切なことを学びました。

他学年の友達を作ることから

学級の人数が少なくなってくると、自分の学級には気の合う友達が見つかりづらいことがあります。そんな時、学年が違ってても気の合う友達ができたら人とかかわりに幅ができて楽しい園生活が送れるのではないかと考えました。少しでもか

かわるきっかけをと、四歳児、五歳児がペアと なって一緒に遊べる機会を作りにしました。

五歳児M児は自分から積極的に動くことは少ないが、何事も丁寧で、相手の動きをよく気遣う姿が見られました。しかし、学級の中では仲良しの友達に従うことが多く、自分の行動に自信がもてないようでした。四歳児F児は遊びの経験が不足しているためか不安感が強く、物事に取り組みと きもゆっくりしていました。この二人なら気持ち が合うのではないかと考え、遊ぶためのきっかけ 作りとして、誕生会のおやつの際に隣で食べた り、遠足の時手をつないだりと交流を繰り返して きました。

十一月に幼稚園の隣の公園に、四・五歳児が一 緒に遊びに行く機会がありました。幼稚園の門の 所で待ち合わせをするとM児とF児は自分たちか ら自然に手をつなぎました。公園に行く道でもM

児はF児の歩くペースに合わせて気遣う姿も見られました。公園に着くとこの二人を含めた数人でかくれんぼが始まりました。かくれんぼが終わっても二人は離れようとはせず、手をつないで公園を歩き始めました。二人とも花が大好きで花を見たり摘んだりしている姿が見られました。後で母親から、M児が「公園ではFちゃんと一緒に遊ぶんだ。楽しみだな」と話していたということを知りました。

この事例からは、子どもたちが自分と気の合う友達を求めている姿が読み取れるのではないかと思います。学級の中での居場所が見つからず自信がもてない幼児が幼稚園生活を生き生きと送れるはずがありません。教師が意図的にペアを組み合わせましたが、友達を探している幼児にとって気の合う子や共感し合える相手が他の学級にということに気付くことは幼稚園生活の楽しみを広げる



ことになると思います。そして、友達を見つけていく意欲、友達をつくる希望を感じ取らせることができ、幼稚園以降の生活も豊かになるのではないのでしょうか。また、ペアを作る時に、両学級の教師がそれぞれの学級の実態をよく把握した上で、それぞれの幼児が互いに自分のよさを発揮できる相手と組み合わせることが、この二人の自己充実につながったと考えます。私は、学年にとらわれず幼稚園全体の幼児のことを知ろうとする教師の意識と、幼児をよく理解した上で、かかわりを深めていく援助を進めていくことの大切さを学

びました。

子どもたちの育ち合いの中で

二事例しかお話しできませんでしたが、まだまだたくさんの子どもの育ち合いがありました。子ども同士がかがわることでお互いに刺激を与え合い、また、積極的に教えたり教わろうとする姿も見られるようになりました。そして、自分の興味をもった遊びにじっくりと取り組める環境も整い、遊びが豊かになっていきました。また、異年齢のかかわりを豊かにしていくことで、遊びが五歳児から四歳児へ、四歳児から三歳児へと伝わり「遊びの循環性」が生まれるのではないかと考えています。このことは今後も更に調べていきたいと思っています。

最後に、子ども同士が育ち合う素晴らしさに気

付かされたと同時に、教師同士も子どもと一緒に育ち合っていることも再認識しました。三学年の幼児に対応することで、幼児の発達をより一人一人に即して理解しようとする柔軟な見方をするようになりました。また、教師同士の連携が欠かせません。幼児のとらえ方を話し合ったり、活動の選択や展開の方法について意見を交わし合ったということがお互いの保育観を磨くことにつながったと思います。考えてみれば、幼児対教師も異年齢、教師同士も異年齢、いろいろな年齢の人とかわることの大切さ、そして素晴らしさを気付かせてくれた園内研究でした。これからも、新たな出会いを求めて、保育を進めていこうと思います。

(東京都中央区立日本橋幼稚園)